

保育者はどのように育つのか

— 保育者効力感および保育者アイデンティティの研究動向と課題 —

佐々木 由美子 ・ 大谷 真理子

Review of studies on pre-school-teacher-efficacy and Kindergarten
-Teacher Identity

Yumiko Sasaki and Mariko Otani

要 旨

専門職としての保育者はどのように育つのだろうか。保育者に多くの役割と高い専門性が求められる今日、それは保育者養成校だけでなく、就職後の保育現場においても喫緊の課題である。保育者の成長や専門性についての研究は1990年代から増加傾向にあるが、近年、「保育者効力感」あるいは「保育者アイデンティティ」という視点から保育者の成長が論じられている。経験年数の積み重ねによる熟達という直線的な視点だけではなく、その複雑性を理解し実像を探ろうとする試みである。本論では、これらの研究動向を概観し、現状における課題を提示した。

キーワード：現職保育者の育ち、保育者効力感、保育者アイデンティティ

1. はじめに

(1) 問題と目的

保育者はどのように育つのか。これは保育の場において子どもがどのように育ち、どのような保育をするべきかを考えることと同様に、大きな課題である。特に近年、保育は大きな岐路に立たされている。女性の就労を促進する政策が打ち出され保育の供給量を増やすべく保育所、子ども園の増設を進めようとする中、保育者不足が叫ばれている。このことは無資格者の保育者としての採用や、安易な資格取得が可能な施策となってあらわれている。近年、保育者による子どもの虐待、不適切な保育に関するニュースを耳にすることが多くなったが、これは決してこの現状と無関係ではないのではないかと考える。子どもの最善の利益を求めることが保育の最大

の責務であると考えた時、この現状は保育の質を揺るがす憂慮すべき事態である。このような社会的背景の中、保育者には以前にもまして多くの役割と、高い専門性が求められるようになってきている。神長(2015)は「幅広い社会的視野と、乳幼児期から児童期、青年期をも見通して人間の発達についての深い理解に基づく、より高度な専門性が求められる」⁽¹⁾と述べており、足立ら(2009)は「従来の子どもに対する保育だけでなく、子育て支援という新たな役割が求められている」⁽²⁾とし、これからの保育者の育成のためには新たな認識が必要であるとしている。

保育研究において保育者の専門性については、神長(2015)が古くて新しい課題と述べているように古くから議論されてはいるが、なかなか深まりを得ないのが現状である。保育現場では日々の業務の繁忙さにより、保育者を育てるための手立てを作り上

げていくことに労力を割けない現実もある。また、近年保育者を育てることに難しさを覚えるとの声も聞かれている。これは現代の保育者に求められる専門性の高さによるものか、園に求められる機能が増加し各園の繁忙が一層増す中、保育者育成に力を傾けられない現状からのものなのか、現代の特に若年層の抱える課題が関係するものなのか調査の必要なところではあるが、保育者の成長が保育現場の切実な問題となっていることは現実だろう。

しかし、現職保育者を対象とした保育者の育ちに関する研究は多いとは言いがたい。これまでの保育者研究の中心は養成課程の学生を対象としたものが極めて多いが、保育者の成長は現職となってからも続き、そこでの成長が専門性を持った保育者として立ち続けられるかどうかを左右する。これらのことから、現職の保育者を対象に保育者がどのように育つのかについて研究を進めていくこととした。

まず、これまでの保育者研究についてみていくと、研究数増加は比較的新しいことがわかる。論文検索サイトCiNiiの検索によると、「保育者 成長」での検索の最も古いものは1989年であるが、論文数の増加は1993年からである。また「保育者 専門性」での検索においては最も古いものは1979年であるが論文数が増加するのは1994年からである。ともに1990年代に入ってから増加であり、幼稚園教育要領の大幅な改定が行われた1989年以降の時期と重なる。2000年代になるとその数はさらに増加する。これは前にも述べたように保育者に求められる役割、専門性が増加、多様化してきたことの表れであろう。

2000年代からの保育者研究は、保育者の成長を外側から概観して段階別に検討したものから、保育者の内側から成長を捉える視点へと展開する傾向がみられる。例えば、秋田（2000）は保育者の成長モデルとしてヴァンダー・ヴェンの5段階モデルを検討しながら、ステージという視点そのものが「外側から内をみて保育者のライフコースを安定した静的なものとして描き出す」ものであると指摘する。「保育者が生きる世界という内側の窓、保育者の声によるライフストーリーの時の微視的な創出過程と

こうしたステージモデルが重ねあわせられ検討されることによって、はじめて、保育者の専門性が自身の内なる声として捉えられる」のであり、「保育者側から保育者の発達過程を考えることが必要」⁽³⁾であるとしている。また足立ら（2010）も、初任者から中堅期を経て経験者へというプロセスに焦点を当てた高濱（2001）の研究成果を評価しながらも、直線的な検討については「保育という営みは保育年数だけで測れるものではない。どのような時期にどのような問題を体験し、どのような模索の中で、どのような再構築が行われたか」⁽⁴⁾を検討することが欠かせないとしている。

このような研究の展開の中で保育者の成長を論ずる視点として近年では「保育者効力感」「保育者アイデンティティ」という語がつかわれることが多くなってきている。これらの研究に共通することとしてあげられるのは、保育者の成長を経験年数の積み重ねによる熟達という直線的な視点だけではなく、その複雑性を理解し、実像を探ろうと試みていることであろう。

「保育者はどのように育つのか」という本論の課題にとってこれらの視点は欠かせない。したがって本論ではこの保育者効力感、保育者アイデンティティ研究を概観し、研究動向と課題を明らかにすることを目的とする。

(2) 研究の方法

論文検索サイトCiNiiを用いて「保育者 アイデンティティ」「保育者 効力感」というキーワードで検索を行った。その結果、「保育者 アイデンティティ」15編、「保育者 効力感」118編、計133編の先行研究を収集した。そのうち、現職保育者を対象とした研究に限定して検討する。これらの手続きにより「保育者アイデンティティ」に関する研究は6編、「保育者効力感」に関する研究は39編となる。

2. 保育者効力感に関する研究動向

(1) 保育者効力感とは

前章でも述べたように、質の高い保育者を育てる

ことは、保育者養成校だけの問題ではなく、就職後の保育現場においても喫緊の課題となっている。では、何をどのようにしたら、保育の専門職としての保育者は育つのか。その手がかりをつかむため、ここでは「保育者養成において重要な概念」⁽⁵⁾とされる保育者効力感についての研究動向を概観していく。

保育者効力感とは、三木・桜井 (1998) によると「保育場面において子どもの発達に望ましい変化をもたらすことができるであろう保育的行為をとることができる信念」⁽⁶⁾と定義され、保育能力の向上に関する要因の一つとされる。すなわち保育者効力感の高い者は「実践を活発に行い努力し自分の能力をうまく活かすことができ」、保育者効力感の低い者は「積極的な実践を避けたり、不十分な活動に終始してしまう」(西山2006)⁽⁷⁾。つまり、効力感は直接的に行動と関連しているのである。保育者効力感が、専門職としての保育者の育ちにおいて、重要とされるゆえである。

この保育者効力感についての研究は、日本では三木・桜井によって端緒につき、発展してきた。三木・桜井は、教師の能力向上の要因としての教師効力感という概念に着目し、対象を「教師」ではなく、「保育者あるいは保育専攻学生」として捉え直したのである。

教師効力感とは、Ashton (1985) によると、「子どもの学習に望ましい変化を与えることができるという信念」と定義されている。教師効力感研究は、Bandura (1977) の自己効力感理論を応用・発展させた研究領域であり、特にGibson & Dembo (1984) によって教師効力感尺度が作成されて以後、盛んに研究がされてきた。これを三木・桜井は保育の独自性を鑑み、「保育者効力感」という用語を用いて、教師効力感尺度をもとに保育者効力感尺度を作成したのである。この尺度を用い、保育者効力感と教育実習との関連を調査した結果、保育者効力感は教育実習によって高まること、保育者効力感だけでなく一般的な自己効力感も向上すること、また実習園が学生の期待に沿うところであり、楽しく実習できたという「実習園との合致感」が保育者効力感の高ま

りに関係しているという知見を得ている。

(2) 保育者効力感尺度作成

保育者効力感研究は、以後さまざまな視点からの広がりを見せ、三木・桜井の保育者効力感尺度とは異なる新たな尺度の開発も行われている。三木・桜井の保育者効力感項目は、10項目からなり(文末表1参照)、子ども理解、保護者対応、遊びの援助、指導、問題解決能力、環境設定等、保育場面全般にわたっている。

一方、西山 (2005、2006) や田辺 (2011) の作成した保育者効力感尺度は、保育内容の5領域の各領域に特化したものである。西山 (2005、2006) は、「人とかかわる力の育ち」という保育内容「人間関係」に関する保育者効力感尺度を作成し、さらに本尺度内容を踏まえた上で尺度項目の内容をより詳細にした多次元「人間関係」保育者効力感尺度へと発展させた。多次元「人間関係」保育者効力感尺度は、「信頼される存在として子どものそばに居ること」、「けんかや葛藤を経ながらも、子ども同士で解決できるように援助すること」「地域のお年寄りなど身近な人に感謝の気持ちをもてるよう実践すること」などの、25項目からなる⁽⁸⁾。

田辺 (2011) は「子どもが十分に全身を動かし、活動意欲を満足させるように保育する」「集団での生活で必要とされる決まりや約束の大切さに子どもが気づき、自ら守ろうとする態度を育む保育をする」等、14項目からなる保育内容「健康」に関する保育者効力感尺度を作成している⁽⁹⁾。現時点において、領域に特化した保育者効力感尺度は、管見の限り、この2領域のみである。

また、小藪江 (2009) は三木・桜井の保育者効力感尺度は指導的観点が強く、養護や見守る保育という視点が欠けていることや、保護者との関わりに関する尺度項目が少ない等の不足点を充実させたうえで、保育専攻学生の実習場面に焦点を絞った保育実習自己効力感尺度を作成している⁽¹⁰⁾。

(3) 保育者効力感と他項目との関連

これらのいずれかの尺度を用いて、保育者効力感と他項目との関連を調査した研究がなされている。

その項目は、保育者のかかえるストレスや疲労、レジリエンス等メンタルヘルスに関わるものから、離職動機、幼少期の体験や保育者自身の子ども観、地域性や担当クラスなど多岐にわたる。

保育者効力感とストレヤ蓄積的疲労兆候など保育者のメンタルヘルスとの関連性について検討したものに、田中 (1999)、西坂 (2002)、前田・金丸・畑田 (2009)、池田・大川 (2012) 等がある。

西坂 (2009) は現職の幼稚園教諭を対象として、幼稚園教諭が感じるストレスと保育者効力感やハーディネスとの関連性を検討している。保育者効力感、幼稚園教諭のストレス評価の4側面(「園内の人間関係の問題」「仕事の多さと時間の欠如」「子ども理解・対応の難しさ」「学級経営の難しさ」)のうち、「子ども理解・対応の難しさ」「学級経営の難しさ」のストレス評価の低さに関わっていることは示されたものの、精神的健康への直接的・間接的影響は示されなかった¹¹⁾。一方、田中 (1999) は、保育者効力感がストレス反応としての蓄積的疲労兆候を和らげる要因になっているとし、前田・金丸・畑田 (2009) においても、保育者効力感が職務内容の満足感を媒介して精神的健康に間接的に影響を及ぼしていることを示した。いずれにしても、保育者の心身のストレスに関する一部の側面に保育者効力感が影響を及ぼしていることが明らかにされている。

また、保育者効力感とレジリエンスとの関連について検討した川村・庄司・三木 (2015) は、レジリエンスの3因子(「楽観的な将来展望と自己肯定感」「成長志向性」「信頼できる他者の存在と充実感」)および経験年数が保育者効力感の「肯定的効力感」に影響を及ぼし、「信頼できる他者の存在と充実感」の低下が「否定的効力感」の高まりに影響していることを示した¹²⁾。離職動機に及ぼす影響を検討した田頭 (2012) は、保育者効力感が高い群ほど離職動機を持ちにくいことや、保育者効力感の高い群は「職場・待遇への不満」「心身の疲れ」が大きな離職動機になるのに対して、保育者効力感が低い群は、離職動機に明確な差異がなく、保育者効力感の高低によって離職動機も異なることを示した¹³⁾。

一方、岩崎 (2010) は、西山 (2006) の多次元保育者効力感尺度を用い、地域差および担当クラス別の保育者効力感を検討している。都市部と地方を比較すると、「発達の視点で子どもを捉えかわる」「関係性の広がりを支える」という因子において、都市部より地方の方が高く、また幼児担当保育者よりも、乳児担当保育者の方が「人とかわる基盤をつくる」という因子において有為に高い結果となった。これにより地域や担当の違いによって、保育者効力感に差があることを示した¹⁴⁾。

子ども観との関連を検討した朝木・鈴木 (2009) は、「活発で純粋な存在」「大切な存在」「能力を秘め、可能性のある存在」という子ども観が、「人とかわる基盤をつくる」という保育者効力感を高めるとし、子ども観の違いによって高められる保育者効力感が異なることを示した¹⁵⁾。過去の遊び経験との関連を検討した渡部・嶋崎 (2004) は、過去に多くの遊び経験を保有することにより、共感性や、問題解決型行動特性、情緒的支援ネットワーク等、心理社会的要因が発達し、それらを媒介として保育者効力感が高まることを示した¹⁶⁾。

これらの研究は保育者効力感と他項目との心理社会的な関連性を模索し、興味深い結果を示している。特に「信頼できる他者の存在」や「遊び経験」は、就職後の保育者支援のなかでも取り入れていくことが可能ではないかと思われる。

(4) 保育者支援にたつた保育者効力感研究

では実際に、どのようにしたら保育者効力感を高め、保育者を育てていくことができるのか。さまざまな知見を積み重ねてきた保育者効力感研究ではあるが、現職の保育者支援を視野に入れた研究はまだそれほど多くない。

酒井・上村 (2003) は、問題解決型事例検討会の前後で保育者効力感を測定し、その変化を追っている。その結果、短期的な効果ではあるものの、事例検討会を通して保育者効力感が向上したことが示されている。酒井らは「事例検討会において発言した満足感が保育者効力感を高める事につながった」¹⁷⁾のではないかとしている。また、西山 (2009, 2011、

2012、2013)¹⁸⁾、西山・片山(2013)¹⁹⁾は、領域「人間関係」に関わる保育者支援プログラムを作成し、プログラムを通して「人間関係」にかかわる保育者効力感が向上するのかどうかを検討し、支援プログラムが有効であることを実証している。その後、その効果が「人間関係」にかかわる保育者効力感だけでなく、保育者効力感全般にも及ぶのかについても検討をおこなっている(西山2011)が、全般にわたっては明確な効果を見いだすことができなかった。それだけ保育者の仕事は、総合的、専門的で多岐にわたっているということだろう。しかし、免許状更新講習において簡易化したプログラムを用いた検討(西山2013)や保育者効力感が最も低下する初任初期²⁰⁾の保育者を対象とした個別研修プログラムを通じた検討(西山・片山2013)の結果、いずれにおいても効力感の向上に明確な効果が見いだされている。

西山の支援プログラムは、認知行動論療法の技法を援用し、効力感の変容を試みたものである。この支援プログラムは主に①効力感と行動変容の機制に関する心理教育、②実践上の課題を保育者自身が整理する診断的評価、③具体的な行動目標の設定、④成功感と自信を高めるための自己観察、⑤目標行動を実行しやすくするための環境調整という要素から構成されている。

これらの研究・実践の成果は非常に大きいですが、西山(2011)自身も述べているように「保育者の効力感を高めるための総合的なプログラムが、現状では見当たらない」²¹⁾のが実情であり、今後の大きな課題の一つである。また、研修に時間を割くことができない保育現場の現状を鑑みたときに、日常の保育の中で実践できるプログラムの開発も必要であろう。

概観してきたように、これまでの多くの研究の成果が「効力の信念は、人々の考え方、感じ方、動機づけ、行為に影響を与える」²²⁾ことを示している。西山の言葉を借りれば「保育実践の原動力」²³⁾であり、効力感の向上が保育実践にも直接的につながっていくことを考えると、今後、保育者支援を視野に入れた保育者効力感の研究を積み重ねていくことが必要である。

3. 保育者アイデンティティに関する研究動向

保育者研究において近年「保育者アイデンティティ」の形成が保育者の専門性の成長にとって重要な視点とされている。本章では保育者アイデンティティに関する研究について概観する。

論文検索サイトCiNiiの検索によると「保育者アイデンティティ」という用語を用いての研究は2005年頃からみられる。それに先駆け2000年頃からは保育者のアイデンティティ地位に関する研究も散見される。西山(2006)は効力感に関する一連の研究の中で、効力感と保育者のアイデンティティ地位との関係について調査している²⁴⁾。その中で西山は特に人間関係の領域に焦点を当ててではあるが安定した個(自我同一性)を自覚できるか否かが保育者にとって重要であるとし、保育者のアイデンティティ形成が力量にとって重要な視点であるとした。このような動向の中で「保育者アイデンティティ」という語を用いた研究がされるようになっていった。

(1) 保育者アイデンティティの位置づけ

保育者アイデンティティを小泉・田爪(2005)は「いわゆるアイデンティティ研究のパラダイムのうち、女性の職業アイデンティティの発達に関する研究」²⁵⁾と位置づけている。また、足立・柴崎(2009)もエリクソンがアイデンティティ感覚を生涯続く発達過程としたことを踏まえ、職業アイデンティティとして保育者アイデンティティを考えた時にはこの生涯発達を見据えた観点が重要であると述べている²⁶⁾。これらのことからわかるように、保育者アイデンティティは青年後期以降のアイデンティティ獲得と密接に関連した職業アイデンティティの一つの形であり、その研究は保育者が一職業人として発達し続けるという生涯発達の視点に立って、再構築を繰り返し確立していく過程を明らかにしようとするものである。

(2) 保育者アイデンティティ研究の必要性

保育者アイデンティティは保育者の専門性をとらえる重要な視点であるといえる。秋田(2000)が述べているように、保育者の成長を外側からの基準でとらえるのではなく、保育者の内側からとらえる視

点となりうる。柴崎(2009)も保育者アイデンティティの形成過程について検討することは保育者の専門性にも繋がると述べ、その必要性について言及している。加えて香曾我部(2011)も技術的合理性と反省的実践家という視点が二項対立的にとらえられている保育者研究の現状を指摘し、これら二つにとられず保育者の専門性をとらえる新たな視点であるとして保育者アイデンティティ研究の必要性を述べている²⁷⁾。

(3) 保育者アイデンティティとは

では、この保育者アイデンティティはどのように定義されているのであろうか。大篠(2007)は「理想とする保育者像を形成していくこと」²⁸⁾と定義し、足立・柴崎(2009)は「私らしい保育の具現者」²⁹⁾と述べている。また西坂・森下(2009)は「保育者としての自己の確立であり、理想やモデルとなる保育者像と自分自身に対する理解を深め、それらを一致させていくことである」³⁰⁾としている。

このように定義されその必要性が述べられている保育者アイデンティティ研究ではあるが、現職保育者に焦点を当て調査したものは決して多くない。今回の調査の限りにおいてこの10年では西坂・森下(2009)と足立・柴崎(2009、2010)の調査のみである。両者とも現職保育者に対するアンケートや面接によりその形成過程を探ることを試みている。

(4) 現職保育者を対象とした保育者アイデンティティ研究の現状

両者の研究とも保育者としてのライフステージにおける危機とそれを乗り越えた体験について調査している。西坂らは特に退職者の多い5～10年目の保育者に焦点を当て、新任期から退職を考えた経験についてインタビュー調査をしている。西坂はこの調査で、①保育者が転機を通して保育に対する気づきを得られ、それまでに蓄積した知識の深まりを得、実践知を獲得していること。②保育者の転機が担任2～3年目に起こりやすいと考察し最初の5年間をどのように過ごすかが保育者の成長にとって重要であること。③保育者の転機の経験ではモデルとなる保育者の存在が重要な意味をなしていると結論付け

ている。

柴崎らの調査研究は保育者のアイデンティティ状態と危機体験との関連についてアンケート調査を行っている³¹⁾。この結果保育者の危機体験と保育者のアイデンティティ状態との関連性については見出すには至らなかったが、保育者のアイデンティティ状態の特徴としてモラトリアム状態の保育者が多いことを指摘し、その支援の必要性を述べている。また危機体験の特徴を①保育者自身の知識、技術不足への不安や戸惑い、②職場内での人間関係への戸惑い、③身体的・肉体的不安の三つに整理している。柴崎らはこの調査によりライフステージに応じた保育者の体験する危機内容は変化していくことを明らかにし、保育者アイデンティティを考える時にもアイデンティティの生涯発達理論を適用することが可能であるとしている。柴崎らはこれに続く研究として、保育者の危機体験についてのインタビュー調査を行いより深く保育者アイデンティティ形成過程の明らかにすることを試みている。この中で保育者の危機は「揺らぎ」と表現され、保育経験年数により新人期から熟練後期までの6段階に分けその内容について検討している。第1の新人期以前の養成期では保育者へのイメージの不明確さ、実習によって生じられる不安。第2の新人期には新しい職場への順応、仕事への見通しが無い状態での実践、養成期に培った理想とのギャップ、先輩保育者からの重圧。第3の初任期では気持ちを理解してくれる人や抱えている問題を解決してくれる人の欠如。第4の中堅期は人生の転換期である結婚、出産との関係から、多忙さ、自己の理想と周囲とのギャップ、身体的・精神的な辛さ、職場での人間関係の戸惑い、待遇の低さ。第5の熟練期では社会的な要求の変化に対応して自己の保育観の変容が求められることである。これによって保育者がどのようなステージでどのような揺らぎを実感しそれを乗り越えているのかについて明らかにしている。

特にこの柴崎らの研究では揺らぎの特徴を整理したうえで、その時期に必要な支援を各段階で示している。この柴崎らの継続した研究においても保育者

アイデンティティ形成にとって「価値ある人々」が重要な意味を持つことが示唆された。保育者の成長において、本人の努力と同時に保育者の置かれた環境要因が大きく影響すると指摘している。その環境要因は第1の新人期以前に関しては家庭環境、養成校の指導。第2の新人期はメンタリングシステムの有無、第3の初任期では保育者の問題に寄り添う園の運営システムの有無、第4の中堅期では園の勤務体制、家族の理解、第5の熟練期ではスーパーバイザーや信頼できる上司の存在であるとしている。なお、西坂・森下、足立・柴崎の両者が今後の課題として挙げていることは、保育者を継続しなかった者、つまり保育者アイデンティティの再構築がなされなかった者への調査も必要と述べている。

このように両者の研究を概観してきたが、保育者アイデンティティ研究ではエリクソンの発達理論に基づいた視点を用い、危機を通して成長する保育者の姿を明らかにした。エリクソンの理論が保育者としてのアイデンティティ形成にも適用できることを示したのである。また、両者とも秋田のいう保育者の内側の窓から保育者の成長を捉えるという点で意義深い結果を見出している。そして、保育者の成長、とりわけ保育者アイデンティティの形成に他者の存在が重要であるとする結果が共通しており、これからの保育者育成にとって保育者を取り巻く環境要因を整えていく必要性を改めて確認したといえる。現職保育者を対象とした保育者アイデンティティ研究はその数は少ないものの、特にここで上げた足立・柴崎らの研究をもって一定の成果を示したといえるだろう。

これらの研究から得られる課題は、保育者アイデンティティの形成過程をどのように保育現場での個々の保育者の育ちに結び付けていくのかということであろう。柴崎らが指摘した保育者の危機の特徴やその支援策は、保育者としての特殊性というより、他の職業とも共通する課題である。元来アイデンティティという語は曖昧さを含み、生きた現場に深く根差してこそ生命力を発揮する⁶²とされていることを考えても、この保育者アイデンティティを保育者が実

際に再構築していく場で、園の管理者や保育者同士がどのように影響しあえるのか、重要な他者となりえるのかについて検討していかなければならない。アイデンティティ研究は「「個体発達」から「関係性の中での発達」をも包含した理論の見直しへと研究領域は広がりつつある」⁶³という。この「個体発達」と「関係性」についてこれまでの研究で、保育者個人の発達に焦点を当て様相を明らかにした上で、関係性の観点では養成や園の体制といった大きな枠組みからの影響について検討されてきた。これらの視点を土台として、これからは一人ひとりの保育者にどのような環境を用意し、保育者の育成に当たるものが、その保育者との関わりの中でどのように支援していくのかについてもさらに検討されるべきであろう。

4. おわりに

保育者効力感および保育者アイデンティティに関する研究動向を概観してきた。保育者効力感や保育者アイデンティティは、保育者の外側から育ちを検討するのではなく、〈信念〉や〈自我〉という保育者の内面から、育ちを検討するものである。それだけに量的な研究だけでなく、個々の保育者の育ちに寄り添った微視的な研究が必要となってくる。

また、それぞれ異なる観点から研究されてきているが、保育者支援という立場に立ったとき、「保育者としての私は、ある行動をうまくやり遂げることができる」という保育者効力感と、「理想の保育者をめざし努力し成長していく私」という保育者アイデンティティは、まったく別々のものではなく相互に支え合い、育ち合い、強化する関係性にあるといえる。

具体的な保育者支援にまで論をすすめた研究はまだ少数だが、先行研究から共通にみえてきたことは、一つには保育者効力感の向上や保育者アイデンティティの形成に、西山が支援プログラムで示したような小さな成功体験の積み重ねが重要である点。二つ目は「信頼できる他者の存在」「価値ある人々」「重要な他者」が必要不可欠な点である。

Bandura (1997) が、自己効力感が変化する情報

源として①制御経験（自分自身で何かを達成したり、成功したりした経験）、②代理体験（自分と同じような人が忍耐強く努力して成功するのを見ること）、③社会的説得（自分に能力があることを説明され、行動を勧められること）、④生理的、感情的状態（身体の状態を向上させ、ストレスやネガティブな感情傾向を減少させること）³⁴⁾をあげているが、先行研究の成果は、これを支持したものとなっている。

これらを踏まえ、今後の課題として2点を挙げる。まず、柴崎らが行った保育者の「揺らぎ」（危機）に焦点をあてた研究に加え、個々の保育者の小さな成功体験、すなわち日々の保育の中における「できた」「わかった」「つながった」という体験に焦点をあてた研究の必要性である。どのような機会やきっかけが、小さな成功体験へとつながったのかを探ることは、保育者の育ちや支援を考える上で、有用であると思われる。

次に個々のケースに応じた微視的研究の必要性である。「信頼できる他者の存在」としてメンター制度が導入されてきてはいるが、枠組みだけをつくっても保育者は思うようには育たない。なぜならBanduraが「モデリングの影響力は、モデルとの類似性に強く影響される。もし、自分自身とモデルとの類似性が高ければ高いほど、モデルの成功や失敗の影響を受けるようになる。もし、モデルと自分自身が非常にかけ離れていると思えば、モデリングの行動とその結果によってそれほど影響をうけることはない」³⁵⁾と指摘しているように、あまりに自分とはかけ離れたメンターは、モデルにはなりえないからである。まさに、関係性の中での保育者の育ちを個々の事例にあたりながら、積み重ねていくことが必要なのではないだろうか。これらを今後の課題として、保育者がどのように育つのかについて、検討を進めていきたいと考える。

引用・参考文献

- (1) 神長美津子 (2015)「専門職としての保育者」『保育学研究』53(1) p.94
- (2) 足立美里・柴崎正行(2009)「保育者アイデンティティ

の形成と危機体験の関連性の検討」『乳幼児教育学研究』18 p.89

- (3) 秋田喜代美(2000)「保育者のライフステージと危機」『発達』83ミネルヴァ書房 p.51
- (4) 足立里美・柴崎正行 (2010)「保育者アイデンティティの形成過程における「揺らぎ」と再構築の構造についての検討—担任保育者に焦点を当てて—」『保育学研究』48(2) p.107
- (5) 三宅幹子 (2005)「保育者効力感研究の概観」『福山大学人間文化学部紀要』5 p.32
- (6) 三木知子・桜井茂男 (1998)「保育専攻短大生の保育者効力感に及ぼす教育実習の影響」『教育心理学研究』46(2) p.83
- (7) 西山修 (2006)「幼児の人とかかわる力を育むための多次元保育者効力感尺度の作成」『保育学研究』44(2) p.151
- (8) 西山修 (2005)「幼児の人とかかわる力を育むための保育者効力感尺度の開発」『乳幼児教育学研究』14、西山修 (2006)「幼児の人とかかわる力を育むための多次元保育者効力感尺度の作成」『保育学研究』44(2) p.154
- (9) 田辺昌吾 (2011)「心身ともに健康な子どもを育むための保育者の資質について—「健康」保育者効力感からの検討—」『四天王寺大学紀要』51 p.179
- (10) 小藺江幸子 (2009)「保育実習自己効力感尺度作成の試み」『淑徳短期大学紀要』48
- (11) 西坂小百合 (2002)「幼稚園教諭の精神的健康に及ぼすストレス、ハーディネス、保育者効力感の影響」『教育心理学研究』50(3)
- (12) 川村高広・庄司圭子・三木さち子 (2015)「保育者のレジリエンスと保育者効力感の関連」『論攷：神戸女子短期大学紀要』60
- (13) 田頭伸子 (2012)「保育者効力感が離職動機に及ぼす影響について—保育者養成卒業生の保育職就労者を対象にした分析—」『広島文化学園短期大学紀要』45
- (14) 岩崎桂子 (2010)「保育者効力感における一考察—地域差・担当別の比較より—」『小池学園研究紀要』5
- (15) 朝木徹・鈴木由美 (2009)「子どもの人間関係を育む保育実践の要因—保育者効力感と子ども観の関連について—」『聖徳大学児童学研究紀要』11
- (16) 渡部努・嶋崎博嗣 (2004)「保育者の保育者効力感と心理社会的要因に対する過去の遊び経験の影響」『日本保育学会大会発表論文集』(57)
- (17) 酒井幸枝・上村恵津子 (2003)「問題解決型事例検討会をととした保育者効力感の向上」『日本教育心理

学会総会発表論文集』45 p.95

- (18) 西山修 (2009)『保育者の効力感と自我同一性の形成—領域「人間関係」について』風間書房、西山修 (2011)「領域「人間関係」に関わる保育者支援プログラムの検討」『幼年教育研究年報』33、西山修 (2012)「領域「人間関係」にかかわる保育者支援プログラムの集団実施による効果」『応用心理学研究』28(2)、西山修 (2013)「免許状更新講習における保育者支援プログラムの簡易実施とその効果」『応用教育心理学研究』30(2)
- (19) 西山修・片山美香 (2013)「初任初期における保育者支援プログラムの個別実施とその効果」『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』152
- (20) 前掲書 西山修 (2005)
- (21) 前掲書 西山修 (2011) p.95
- (22) アルバート・バンデューラ/本明寛、野口京子監訳 (1997)『激動社会の中の自己効力』金子書房 p.3
- (23) 前掲書 西山 (2006) p.158
- (24) 西山修 (2006)「子どもの社会性を育むことへの保育者効力感とアイデンティティ地位との関係」『研究論文 子ども社会研究』12
- (25) 小泉裕子・田爪宏二 (2005)「実習生の保育者アイデンティティの形成過程についての実証的研究 保育者モデルの影響と保育者アイデンティティ「私は保育者になる」の関連」『鎌倉女子大学紀要』12 p.14
- (26) 柴崎正行・足立里美 (2009)「保育者アイデンティティに関する研究の動向と展望—日本における保育者アイデンティティ研究—」『大妻女子大学家政系研究紀要』45
- (27) 香曾我部琢 (2011)「保育者の専門性をとらえるパラダイムシフトがもたらした問題」『東北大学教育学研究科研究年報 第59集第2号』
- (28) 大篠あこ (2007)「保育者アイデンティティ形成に関する考察：保育者を目指す学生の実習における保育者像の変容から」『洗足論叢』37
- (29) 柴崎正行・足立里美 (2009)「保育者アイデンティティに関する研究の動向と展望—日本における保育者アイデンティティ研究—」『大妻女子大学家政系研究紀要』45 p.25
- (30) 西坂小百合・森下葉子 (2009)「保育者アイデンティティの形成過程—保育実践経験5～10年の幼稚園教

諭に対するインタビュー調査から—」『立教女学院短期大学紀要』41 p.51

- (31) 前掲書、足立里美・柴崎正行 (2009)「保育者アイデンティティの形成と危機体験の関連性の検討」 p.25
- (32) 西平直 (1993)『エリクソンの人間学』東京大学出版会
- (33) 前掲書 柴崎正行・足立里美 (2009)「保育者アイデンティティに関する研究の動向と展望」 p.25
- (34) 前掲書 アルバート・バンデューラ/本明寛、野口京子監訳 (1997) pp.3-5
- (35) 前掲書 アルバート・バンデューラ/本明寛、野口京子監訳 (1997) p.2

文末資料

表1 三木・桜井(1998)による保育者効力感尺度

項目番号	尺度項目
1	私は、子どもにわかりやすく指導することができると思う
2	私は、子どもの能力に応じた課題を出すことができると思う
3	保育プログラムが急に変更された場合でも、私はそれにうまく対処できると思う。
4	私は、どの年齢の担任になっても、うまくやっていけると思う
5	私のクラスにいじめがあったとしても、うまく対処できると思う。
6	私は、保護者に信頼を得ることができると思う
7	私は、子どもの状態が不安定な時にも、適切な対応ができると思う。
8	私はクラス全体に目をむけ、集団への配慮も十分できると思う
9	私は、1人1人の子どもに適切な遊びの指導や援助を行えると思う
10	私は、子どもの活動を考慮し、適切な保育環境(人的、物的)に整えることに十分努力できると思う

(ささき ゆみこ) 東京未来大学

(おおたに まりこ) 百合丘めぐみ幼稚園